まえがき

高層気象台長 定村 努

高層気象台の設立の意義は、高層気象観測を気象学の一分野として確立することにあつた。大気の状態を立体的に把握することは今日の気象学にとって非常に重要な手段となっており、数値予報の基礎的な資料として欠かせないものとなっている。高層気象台は、大正9年に設立され、大正12年に彙報第1号、大正15年に第2号が発行されている。この第2号で「風速度の季節的变化 (略)冬は地面で2.9m/sの風速であつても三百米の高さでは急に増して5.7m/sに達する。けれども五百米以上一軒位までは其の増加率が小さい。それより以上は増加率再び大となり海拔十軒にては風速70m/sを超ゆるに至る。(略)」と記述されている。このように高層気象台彙報は世界的にも先進的な知見や技術を世に広め、後世に伝えるために発行されてきたもので、高層気象台の性格を他の気象台に対して特に際立たせている。彙報ではそのほかにも気球の大きさと上昇速度や破裂高度との関係、無線測器の実験結果など、後の高層気象観測の運用に重要な論文、報告を数々発表してきた。

諸先輩のように、自分で課題を見つけ、研究、開発を行い、論文、報告に纏めて発表する作業は、入試問題のように答えを用意されている問題を解くのと異なり、結果(正解の存在)に対する不安と戦いながら進める必要がある。失敗を恐れるあまり、ゲームの攻略法をインターネットなどで簡単に得てきた現在の若者が最も苦手とする事である。であるからこそ、高層気象台職員には果敢に課題に挑戦し、失敗を恐れず、結果に対する不安と戦いながら、研究、開発に取り組み、これを纏めて世に問う仕事を継続していただきたい。

今回は、論文1編、技術報告6編が投稿された。高層気象台が所掌する観測業務にかかる課題がそれぞれの対象となっている。これらの論文や報告が、高層気象観測技術の今後の進展に大いに貢献していくことを期待する。

なお、世間では科学論文の倫理性について議論されている。特許取得の関連などから、時間に追われ、十分な検証を実施できていない例もあると聞く。できるだけ美しい論文に仕上げなければ評価されない風潮にあることなども原因ではないかと思われる。このことが研究そのものを否定する結果となり、研究を進める障害になることを恐れる。必要以上に論文作成に対する恐怖心を持つ事のないことを願う。